

②土質の状況

底質中懸濁物質含量（以下、「SPSS」という。）については、沖縄県衛生環境研究所が提案している川に堆積した赤土等の調査方法及び評価方法（沖縄県衛生環境研究所35号）を用いて、轟川、事業実施区域からの排水路及び宮良川のSPSS値を解析した結果を表-6.5.1.1(9)及び図-6.5.1.1(15)に示した。

調査地点の中で最もSPSS値が高い地点は、St.Dで夏季（8月）に440kg/m<sup>3</sup>、秋季（11月）に360kg/m<sup>3</sup>、轟川河口に近いSt.Hでは、夏季（8月）に140kg/m<sup>3</sup>、秋季（11月）に120kg/m<sup>3</sup>となっており、「河床表面にうっすら赤土の堆積が見られる。歩くと河川水が濁る。」とされているランクⅢ程度の値を示している。

なお、事業実施区域から工事中に機械処理水が排水される近傍のSt.Eでは、夏季が220kg/m<sup>3</sup>、秋季が140kg/m<sup>3</sup>となっている。

表-6.5.1.1(9) 河川のSPSS値

水域	調査地点	(kg/m <sup>3</sup> )	
		8月	11月
轟川	St.A	160	160
	St.B	200	110
	St.C	100	130
	St.D	440	360
	St.E	220	140
	St.F	170	72
	St.G	49	130
	St.H	140	120
排水路	St.1	200	160
	St.2	10	2
	St.3	1	5
宮良川	St.4	610	800

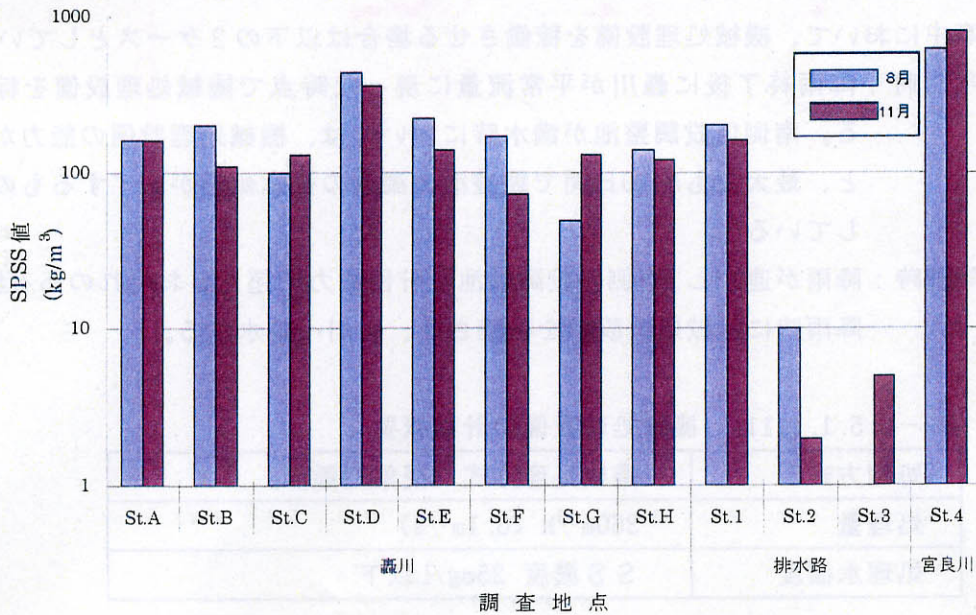


図-6.5.1.1(15) 河川のSPSS値